

# 患者の力

## 時代が求める新しい医療の姿

終了しましたので概要を報告します。

日時 平成29年7月22日(土)  
場所 サンシップとやま 603・604号室  
講師 慶応義塾大学看護医療学部  
教授 加藤 眞三 先生

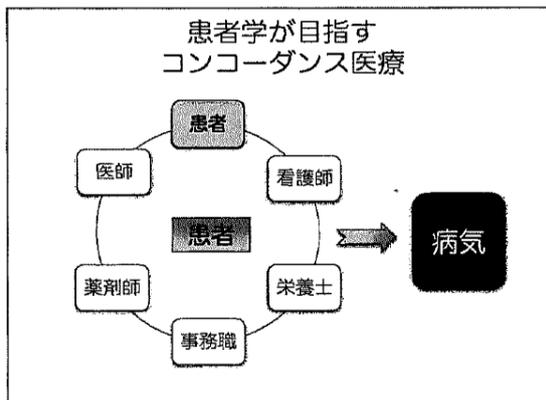
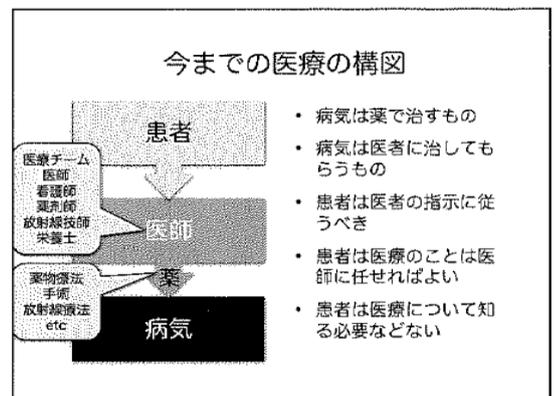
### I 講義と交流会の概要

#### 講義 「患者の力」

##### 1 「患者には力がない」はこれまでの考え方

- 患者は何もできない。弱い存在だ
- だから患者を助けてあげなければいけない
- 病気の治療は専門家に任せておけばいい
- 患者はできるだけ安静にして、何もしないほうがいい
- がん患者は働かなければいい

##### 2 「今、時代はどんな医療を求めているか？」



患者と医療者の関係性が変化している。

医療者と患者は共有した情報をもとに医療の方針（目標）を合意し医療行為を行うコンコーダンス医療へと変化を目指している。

### 3 患者学で患者が学ぶべきこと

#### A 医療者との関係の持ち方

- 1 医師を選ぶ
- 2 医療機関を選ぶ
- 3 医師と対立せず協働する：対話する
- 4 医師に頼りすぎない：他の医療職を生かす
- 5 医療者と感情
- 6 医師（医療職）を変える

7. 病院を変える      8. 医師を代える      9. 病院を代える

## B. 医療情報とのつきあい方

1. 怪しげな情報にだまされない
2. 単純化され過ぎた話しに飛びつかない
3. 対立する意見があれば両方をきいてみる
4. 他人は自分に有利な情報しか提供しないことを前提に
5. 患者同士で情報を交換する
6. 専門家の意見もきいてみる
7. 最終的に決めるのは自分

## C. 自分の生き方を見つめなおし、医療・生活に反映させる

1. できること、できないことを見分ける
2. 自分でできなければ、助けてくださいと言える
3. 家族との関係性を見つめなおす
4. 社会との関係性を見つめなおす
5. 患者同士の連帯を持つ
6. 命の多様性を受け入れる
7. 病気をきっかけに自分の生き方を変えられる人もいる
8. 人類と科学の付き合い方を考える演習にもなる



慢性病、難病、がんなどの患者が、自分の抱える不安を話せる場所を創る場づくりとして

### 「慢性患者ごった煮会」を開催

- 同じような病気をもった患者だからこそよく聴ける
- 自分一人ではないこと、仲間がいることを知る
- 今までの生き方を見つめ直せる
- 困難な状況から抜け出した人を知ることができる
- 違った生き方があることを知る。

#### グループワークのルール

- 最初に簡単な自己紹介
- 病気によって生じた、不安や困っている事
- 約 10 分間以内を目安に
- 他人の行動や考え方を批判しない。  
    言いつばなし      聴きつばなし
- 秘密の厳守
- 自分の体験から参考までに述べる
- 他人に自分の考えを押し付けない

#### ごった煮会で語る内容の例

- 自分が病気を抱えてどのような問題が生じたか
- 病気のためにどんなことが不安か、何がつらかったか
- 辛い時、苦しい時にどのように対処してきたか
- どのような事が問題を乗り切るきっかけになったか
- 自分の体験を中心に話す
- 他の人に教えようとしらない

## II 参加者の感想等

- 患者自身も知識を得て、医療チームに加わり意思決定をするコンコーダンス医療について学んだ。自分の意見を伝えるためには知識と勇気が必要だと思った。
- 患者が医療者を変えていくという視点が大切だということが分かった。患者会はそうした考え方も学べる場だと思った。今日の講義はこの先、力強く踏み出す推進力になりそうです。
- 「自立とは多くの人に依存することである。助けてくださいと言えた時、あなたは自立している」という考え方は印象的でした。生きるためには確かに自立ですね。